

京都市中学校退職校長会

「ライフワークとしてのボランティア活動」

～大震災の救援活動と

インドの学校支援への道とこれから～

特定非営利活動法人日印教育支援センター

理事長 山本 宏之

(元京都市立花背第二中学校校長)

まず私のボランティア活動の歩みと学んだことについてお話しいたします。

私のボランティア活動の始まりは、1995年の阪神淡路大震災からであります。その当時、私は教頭をしていたのですが、ニュースの映像を見た瞬間、私の心は激しく揺れ、何かしなければという思いに駆られました。矢もたてもたまず、1月19日仕事を終えてから深夜、バイクを出し、現地から依頼のあった医療品や衛生用品を、液状化し多くの建物が傾いている西宮に送り届けました。信じられない光景。その後時間があると深夜や休みの日に各都市をまわりボランティアのリーダーに会い、緊急に必要なものを聞いてまわりました。その状況を翌日の職員朝礼で報告し学校内に広めました。またミュージシャンの友人とエンゼルネットワークという組織を作り、全国に情報を発信し救援物資を学校に送ってもらいました。それらを協力しあって現地に直接持っていきました。その他、日曜を使ってみんなが元気になるような催しをしたり、無我夢中で動きました。そのことにより学校もまとまった気がします。その活動を通じ、私はボランティアの原点を学ぶことができました。

それは、震災後1週間目に神戸の長田区に友人を誘ってバイクでキムチ100kg運んでいる途中のことです。神戸市役所に立ち寄った時、市役所は避難した人で一杯でした。そこにいたおばあさんが、私に『のどが渇いています。水があったらお願いしたいのですが。』と言われました。私は何も考えずに『ごめんなさい。今持っていませんので。』と言って断り、友人と先に行ってしまいました。しばらく走った時、胸に後悔の念がグググッと湧いてきました。私はバイクなのでもと来た道に戻り川を越え大阪側に来ると水を買うことができたのに、なぜ戻って水を差し上げなかったのかと……。そこから、これからはよく考え、人の立場に立ち絶対に悔いの残らないように動こうと誓いました。

その後1997年の冬にはロシア船タンカーオイル流失事故でのオイル除去作業に参

加いたしました。

1998年から4年間PTAに呼びかけ、世界の困窮地に向け使わない衣料を集めてトラックで神戸港まで運びました。

2000年には琵琶湖渇水時にオオカナダモの除去作業に参加しました。

2004年には台風23号で舞鶴市由良川流域が冠水した時、PTAに呼びかけ雑巾を収集配送いたしました。

2007年4月退職直後、能登半島地震で被害にあった過疎地での復旧作業に妻と共に従事いたしました。

様々な所で動きましたが、常に自分の動きに反省すべきことと学ぶことが多々ありました。そのひとつとして能登半島地震の時、門前にあるボランティアの集合地でガーンと頭を打たれたことがありました。それは年取ったおじいさんが、長いすに座って、『きょうは何もすることがないから手伝いに来た』と軽く話をされていました。ボランティアって意気込んでするものじゃない。大見得をきらずに日常のことのよう自然に動くことなんだと学びました。

そして2007年の8月からインドのブッダガヤの学校の支援活動を開始し、2011年には東日本大震災後の4月～5月にかけて、気仙沼市立大谷（おおや）中学校の冬水田んぼの復旧作業に参加しました。

振り返ればボランティアとは「動かずにはいられない。できることからボランティア」ではないかと思えます。また、動くことによって、多くの人たちと心と心のふれあいができ、人間関係も広がっていきます。これは私にとって何物にも代えがたい財産となっています。

次に、東日本大震災の復興に携わったことについてお話しいたします。

5月の連休に、私はインドのNPOの代表であるダルメンダルさんと、退職校長の藤野先生とで気仙沼市の大谷中学校の冬みず田んぼの再生にでかけました。瓦礫・家屋・ガラス片の入り込んだ田んぼからそれらを取り除き、田植えができるようにすることでした。初めはこんな大変なことできるわけないとみんな思っていました。連日、地雷撤去のような地味で根気のいる作業が続きました。すると予定よりも早く裸足で足を踏み入れることができるようになったのです。みんなで力を合わせるとすごい！ 大感激！ このことは、東北で初めての田んぼの復旧ということで新聞でも報道され、多くの方たちに希望をもってもらえることになりました。

続いてそこでの経験から学んだことについてお話したいと思えます。

まず初めに《自然の偉大さへの畏敬の念》であります。自然を甘く見てはいけない。自然の力のすごさ、その中でいかに共生していくかということに真剣に取り組む必要があるということ。第二に《正しい情報活用》です。あの時、新聞紙上ではボランティアが多く来るとパニックになるからセーブするよにとの情報がありました。しかし、自らの手で丹念に調べると人はいくらあっても足りない所があるということがわかりました。情報は自分で確かめてみるのが大切です。第三に動くときの基本ですが《人の立場に立つことができるやさしさ》があるかということです。やってあげている、動いているように見せかけるのではなく、心底立場に立つことが基本になればならないということです。第四に《様々な取り組みができる》ということです。自分のできることは何なのか工夫してみる。人の数だけ救援支援の方法はあるのです。それを考えるのが大切です。第五に《人間の力のすばらしさ》です。不可能とあきらめずに取り組むと必ずできるということです。歴史上多くの人災天災があっても人々は復興を信じて動いたからこそ今の世界があるのです。第六に《思い続けること、決して忘れないこと》であります。被害にあった人たちのことを常に思い続け決して忘れないことです。新聞紙上から記事がなくなっても現地には爪あとが残っているし、人の心に傷は残っているのです。私は阪神淡路大震災から、東北の地震津波の被害地、原発被災地において多くのことを学ばせていただきましたが、これを今後私の生き方に活かしていこうと思います。

続いて現在続けているライフワークとしての動きですが、2011年5月、特定非営利活動法人「日印教育支援センター」を立ち上げました。そのNPOが目指しているものと今後の課題についてお話したいと思います。

まず、なぜインドで動いているのですかと、いろいろな人から訊かれることがあります。これはたまたまなのです。退職した2007年7月に私と妻が東京で偶然インドの青年ダルメンダルさんに出会いました。話をしていると、『今年始めに貧しい子どもたちのために、まったく無料の学校をブッダガヤに作りました。ぜひ来て欲しい。インドの全ての状況を見てもらおうと思います。』と、一晩中、学校にかける思いを語ってくれました。家に帰ってから妻と数日話し合いました。私的にはいろいろとしなければならないことがありました。でも、インドの青年が学校を見に来て欲しいと懇願していることをここで断ることはできない。断ると絶対悔いが残るのではないかとにかく行こうということになりました。そして1ヵ月後に、私と妻はインドの学校に行ってしまったのです。

その学校はインドの東北部にあるビハール州（人口1億人）ブッダガヤのカトロワ村にありました。ブッダガヤは釈迦が悟りをひらいた地で世界遺産にも指定され、全世界から

仏教徒がお参りに来るところです。しかし、インドでもっとも貧しく識字率が低いところ  
です。路上生活をしている人たち、物乞いでしか生活の糧がない人たち、身体に障害のあ  
る人たち、昼間から少しのみやげ物を手に持って物売りを行っている子ども、仕事がない  
ため昼間からトランプで時間つぶしをしている青年達。

学校に行ってみました。そこで見たものは、広野の中にぽつんと二つの小さな建物があ  
るだけ。土間に座って授業を受けているのですが、驚いたことにその子たちの表情の明る  
いこと。キラキラした目で先生の言われることにしっかり耳を傾け学んでいるのです。私  
はその時、何をしてもよいかわかりませんでした。日本の遊びやじゃんけんを教えたりし  
ました。妻は日本の歌を教えていました。すると子どもたちが、飛びついてくるのです。  
私はぐっと抱きしめてやり、また、肩車をしてやりました。電気も何もない土でできた家、  
学校で支給している制服以外着るものもない子ども達。でもたくましく生き抜く姿に触れ、  
インドに行く前にダルメンダルさんが言っていた『先生、インドに行ったら元気になるよ』  
が実感としてわかりました。私の生活はその日から大きく変わりました。帰国後、これか  
らはこの学校の子ども達に自分のできることを精一杯やろうということで動き始めました。

何ができるかわからない。でも行くことによって子ども達にとっては勉強の励みになっ  
ていくのです。行くたびに『見て！見て！』と私に列を作ってノートを見せにきます。習  
いたての英語を使って話しかけてきます。また、インドの青年たちのホームステイを引き  
受け、京都の小中学校の授業を見学してもらいもしました。学校があることを信じてもら  
うために学校の測量をおこない平面図を作ることもしました。何とかインドを知ってもら  
うための講演も各地で行いました。

一方困難なことも多々ありました。その中で最大のものは、 賄賂を要求し学校をつぶ  
そうとする地元の警察のトップを相手に、支援者子どもたちと共に裁判で闘ったことです。  
1年半の闘いの後、インドの歴史上NPOとして初めての勝利をおさめることができました。

そして学校教育目標を「確かな学びをもとに 自主自立の力と愛を育成する」に設定し、  
外部から来られた方にわかるように「学校要覧」を作りました。

その他いろいろなことがありましたが、おかげで4年の間に3歳から14歳の子どもた  
ち3校1000名が通う学校となりました。しかし、2010年末にそれまで支援してい  
た日本のNPOが突然解散し、支援基盤を失った学校が廃校に追い込まれる危機に陥りま  
した。混乱する中でインドからもまた日本で支援していた人たちからも私に『なんとか先  
生が立ち上がって新しいNPOを作って学校を続けて欲しい』という要望が相次ぎ、つい

に決心いたしました。『よし、私のライフワークとして人生をかけて動こう』と。

初めてのことで戸惑いながらも2011年3月には理事、立上げ人、定款等々を創り上げ、5月に京都府から特定非営利活動法人「日印教育支援センター」として認可され登記できました。7月17日には京都市教育委員会、京都新聞社にお世話になり上京区の妙蓮寺で「日本とインド教育の架け橋」として立上げイベントを行い、市民の方に広く知ってもらい取り組みをいたしました。しかし、教職員の給与をはじめ全てを支給しなければ学校に来ることができない子どもたちが1000名もいるのです。この1年間、なんとか運営資金を得るため全国様々な人たちに会いに行きました。けれどもなかなかむずかしいのが現状です。しかし、今は種まきの時と考えています。いつかは芽が出、花が咲くことと思っています。幸いなことに、真剣に考えてくださる方々が会員となり、徐々にしかし確実に進んでいっています。

続いて「日印教育支援センター」の活動目的をお話いたします。目的は「インドにおいて貧困の為、教育を受ける機会のない子ども達を支援するとともに交流活動を通して日印が相互に学び合い、国際理解を深める団体です」としています。

まずブダガヤの無料の学校の支援ですが、インドのNPOの理事長であるダルメンダルさんとともに動き、学校の継続、給食・医療の再開は自明のこととして、NPOとしては初めてのCBSE（高等学校）の認可をとる事、さらにカレッジを作りここで育った卒業生達の進路保障をおこなうことです。

また、5年間インドに行っている間に私はこの学校から今の日本の教育が学ぶべきものがあるのではないかということに気づきました。最下層の子どもたちの熱心な学びの姿勢、日本よりはるかに高い教育内容（小学校5年生の算数の教科書の内容が日本の高校1年生のレベル）、いじめも不登校もなく、感謝の気持で学校に来ている子ども。厳しくも熱心な先生、一方インドは日本の進んだ教育システム、教育の機会均等について学んでいく。日本とインドとで教育交流を行い学びあうことにより、共によりよい教育ができると思っています。

「教育は社会を変える」 教育の重要性はここにあります。

学校が存続してもその次の段階を考えないと社会は変わることはできません。出口(職場)が開いていないと安定した生活ならびに次の子どもたちの就学の保障はできないのです。このことについて、ビハール州の州議会議長と話し合いをしたところ、私に教育交流への取組と共に日本の企業がビハール州に産業をおこす架け橋として動いて欲しい。全面的に応援するからと熱いメッセージをもらいました。産業が盛んになると、そこに学力を

身につけた卒業生たちが就労し、学校を支援していく。そして、インドと日本の間で動いていく。このサイクルは今後きっと必要となり、また実現していくと思っています。

これからの日印教育支援センターは、京都市教育委員会、各大学、教育関係機関との連携、企業のCSR（企業の社会的責任）との協働、教育投資から始まる日本企業のインド進出の仲立ちをする活動と広範囲な動きになっていくと思います。

そして動くためには、人が必要です。現在会員は全国に様々なジャンルの人たちで70人ほどいます。みんなで力を合わせながら新しい国際関係が作れたらいいなと思います。インドの人たちが世界で一番尊敬、信頼している国は日本なのですから。

この活動には、京都市の退職校長先生方にも動いていただいています。F先生は理科の実験を伝え、T、Y先生と一緒にラジオ体操をやったり支援物資を運んでくださいました。また三人とも日印教育支援センターの会員になってもらっています。

これからは東日本大地震の後の各国の支援からもわかるように、日本人、インド人という垣根はなく地球人として動くことが大切だと思います。そして、数年後にはインドと日本は世界におけるよきパートナーとして動いていると思います。

ぜひ、皆様の中でいっしょに活動しようという方がいらっしゃったら、気軽に会員になっていただけたらうれしいです。

また、インドに個人的に行ってみたい方は遠慮なくご相談ください。

最後に私の生き方として心がけていることを申し上げて、しめたいと思います。

第1に『人生は一度しかない。今やれることを精一杯やろう』

第2に『人の悲しみは 自分の悲しみ』

第3に『人のために共に動くことの喜び』であります。

きょうの会場にはインドの教科書、写真、子どもたちの絵を展示しております。ゆっくりご覧になってください。

※後記 2011年末にインドの3校あるうちの1校が、土地建物の所有者の都合で現在休校中。従って学校は2校で生徒数は600名となっています。